八代集に於ける賀歌の研究

江崎都

賀歌は「ほぎ歌」の発展として、「古今集」以下の勅撰和歌集に見られる歌の分類の一つである。八代集を背景として、国歌大観により、賀歌を部立、数の上から、或いは内容面から眺めてみたいと思う。

一、八代集部立に於ける賀歌

八代集の賀歌を研究する為には、当時賀の部に対してどの位の意識があつたかを見ておく必要があろう。そこで各部立を調べてみると、八代集に於いては各集とも賀の部を有し、しかも、四季の部の次に配置されている、但し、後撰、千載は異る。二集が位置を異にしているが一応定まつた部とみてよかろう。

二、賀歌の部の順序

前述の後撰、千載を除く六撰集の賀歌の部は四季の次に位置している。この位置について折口信夫博士は、

賀歌といふのは、四季の歌と深い関聯を持つてゐる。萬葉巻八、十から推して来ると賀歌は宴遊の中で賀歌をうたふ。其から出てゐる。いはゞ賀歌と四季の歌といふものは、同じ動機で生れて来るものである。……賀歌は古今の巻一から六までの四季の歌に接続させてゐるのは、理由のあることである。……（折口信夫著日本文学史ノートⅡ二百五十頁）

と、賀歌が四季の部の次に配置されているのは理由のある事と記されている。この事は、万葉をも研究してみないとわからない事ではあるが、とにかく以上の様な理由も考えられるだろう。

一方、後撰集では最後方に哀傷と一緒になつて一巻を成しているし、千載は四季―別―旅―哀傷の次に位置している。これ等も又、理由が考えられよう。

三、賀歌数について

	古今	後撰	拾遺	後拾遺	金葉	詞花	千載	新古今
総数	1111	1426	1351	1220	716	411	1285	1979
賀歌数	22	18	38	36	29	13	35	50
比(%)	2.0	1.2	2.8	3.0	4.0	3.2	2.7	2.5

右の表は八代集の各集ごとに賀歌数を示したものである。この表によれば、最も多いのは新古今集の五十首、最も少いのは詞花集の十三首であり、八代集賀歌総数は二百

四十一首となるのである。よつて各勅撰集に於ける比率を調査するに、金葉の四・〇%が最も多く後撰集の一・二%が最も少いのである。

賀歌は各集平均二・五%しかない微々たるものであるのに、その平均の1/2に満たない後撰集の賀歌数に何か特別の理由がありそうだ。この事については後に考察する事にして、賀の歌は微々たるものであるが、これを他の部と比較してみよう。先ず各集とも有している部との比較。

中心は四季歌、恋歌、雑歌であり、この三つの部が主要部分を占めている事は云うまでもない。賀歌が同じ定まつた部とも云いながらも、四季、恋、雑の歌数には比較にならないように少い。比較されるのは別歌のみである。後拾遺集までは別歌の方が勝つているが、金葉、千載、新古今になると、賀歌の数が多くなる。賀歌と別歌は一方は祝い、一方は悲しみと、対象的な部であるのも面白い。

次に各集すべてには備つていない部との比較。哀傷の部を金葉、詞花は脱しているが他の集では多くの歌数をもつ部であり、倒底賀歌の及ばない部である。

賀の部は編纂態度として、部、位置は定められていたものの、別歌、羈旅とは同程度、もしくは、それよりも低い意識しか持つていなかつたのではないかと思われる。

○ 後撰集に賀歌数が少い理由。

前述したように、後撰の賀歌は特別少いようである。この理由を考えるには、先ず後撰集の特徴をみてみよう。

後撰集の部立は、春、夏、秋、冬、恋、雑、羈旅、慶賀、哀傷となつていて、離別と羈旅、慶賀と哀傷はそれぞれ一巻にまとめられている。歌数の上では恋の歌や雑歌が圧倒的に多く、恋歌では全歌数の約四割を占めている。大体に於て、全歌数に対して、その部の歌数が四割を占めている部は他になく、この後撰の恋部以外には見出されないのである。

久松潜一氏は後撰集について、「後撰集には三つの特色がある。贈答歌が多いこと、詞書が長いこと、詞書の中に三人称で書かれたもののあること。」（日本文学史中古久松潜一編二百十七頁～十八頁）等、又、島田良二氏の論文にも、後撰集には贈答歌や詞書の長いことを指摘し、歌物語的契機の特質がある。と言われている。

歌物語の骨子を成すものは言うまでもなく恋の歌であり、それは必然的に贈答という事が考えられ、また詞書の長くなる事も考えられる。また、後撰は四季の歌にまで恋を表現した歌が多数を占めている。

後撰集の賀歌には二組の贈答歌が含まれている。賀歌で他に贈答歌は、後拾遺集に一組、金葉集に一組含まれているのみである。そして「女の許につかはしける」と言う詞書が、後撰の賀歌に一例見出される。このような詞書は他の賀歌にはみられない。

恋の歌に重点を置いた後撰撰者は、恋と贈答の歌になる要素の乏しかつた賀歌を、少数にとゞめる事になつたのだろう。しかもそれは、各集そなえている賀歌の性質とは少し趣の異なつた性質のものを載せるにとどめたのであろう。又賀歌の位置も哀傷と共に一巻を成し、最後方に置いた理由の一端を窺える。

賀歌は大体に於いて数が少いが、その中でもまた後撰集がはなはだ全歌数に対しての比率が少いので検討したまでである。これ等は各々の集の編纂意識が異る結果の為と思われる。

四、賀歌の内容

㈠　どんな場合に詠まれたか

詞書により賀歌の内容を判断すると、その種類は、算賀、出生、元服（裳衣）、大嘗会、歌合、前栽の宴、根合、祭の使、贈物にそへて、子日、入内、この外に題志らずと言う歌もある。

算賀、出生、元服、大嘗会、歌合の時と詞書した歌が各集共通のものである。ところが算賀、出生、元服等の祝の席で詠まれた歌は後拾遺までに見られる。特に古今集は算賀の時と出生を祝う歌のみである。それが金葉、千載では一首も含まれていないのである。それにひきかえ、拾遺から大嘗会の歌が採り入れられ、又それと共に、歌合の時に詠まれた歌も拾遺集からはみられる。

これ等は時代の推移により、編集する態度が異つてくるのではないだろうか。

以上の調書について主なものを次に詳細に調べる事にする。

㈠　算賀

算賀は長寿を祈る会で、八代集に於いては四十、五十、六十、七十、八十、九十の賀の範囲である。

もとやすのみこの七十賀のうしろの屏風によみてかきける　　素性法師

古にありきあらずは志らねども
千年のためし君に始めむ　　（古今三五三）

右の歌は祝寿の意を述べたものだ。

さだやすのみこのきさいのみやの五十賀奉りける、御屏風に桜の花のちる下に人の花見たるかたかける日よめる　　藤原興風

徒にすぐるつき日はおもほえで
花見てくらす春ぞ少なき　　（古今三五一）

右の歌のように同じ長寿を祈る会での歌の場合でも前の歌とは異る。折口博士も「此では祝ひの歌にならない。なるとすれば逆説の形においてである。だから屏風の歌さえ詠んでいれば賀の歌になる。」といわれており、あながち祝賀の意にのみ拘泥しないのである。

八代集の算賀の歌全部で四十三首あるが、そのうちの二

十三首は絵になり詠まれている。結局は題詠と同じような事になる。そこに賀の意味の出方が薄く、或いは無いと言う事も生じ得るが、しかし、前記のように「屏風の歌さえ詠んでいれば賀歌になる」との考えに至れば敢えて問題にする必要もなさそうだ。

(ロ) 大嘗会

平治元年大嘗会悠紀方の風俗歌近江国　　参議俊綱

千坂の森をよめる。

君が代の数にはしかじ限なき
千坂の浦のまさごなりとも　　(千載六三六)

右のような大嘗会の歌は古今集に於いては、大歌所御歌の部に五首程見出される。

君が代はかぎりもあらじ長浜の
まさごの数はよみつくすとも

大嘗会の歌であり、明らかにこれ等の歌は賀の歌である。古今集では賀の部に入れていないのは分類が徹底していなかつたか、編纂態度の相違によりこの様になつたのだろう。

(ハ) 歌合

古今、後選集の賀歌には歌合の歌が一首も採り入れられていないが、しかし、他の部ではそうではなく、後選集や金葉、詞花集等よりも、多く選入されているのである。

古今集には歌合の歌を全体的には九五首撰入していながら、賀歌には一首も撰入されていないのである。

そこで古今集に撰入されている歌合の内容を調べてみると、是貞親王家歌合、寛平后宮歌合、亭子院歌合等で、中でも寛平后宮の歌合が最も多い。寛平后宮歌合は、春夏秋冬及び恋、各二十番都合百番であつた。亭子院歌合は、初春、季春、夏、恋の各十番でこの時代の歌合には共通して賀に関係した「祝」の題が無い事だ。平安前期の歌合には、題は披講の季節と恋の範囲に終つている。

ところが平安後期の歌合は、すべての歌合に「祝」の題が含まれている。例えば、新古今集に撰入されている、尺喜四年四月三十日皇后宮春秋歌合は、左は春の景物、右は秋の景物で最後に祝をそえている。高陽院七番歌合も、桜時鳥、月、雪、祝の五題各七番、

歌合の内容によつて、撰入の有無が考えられる。

今まで如何なる場合に詠まれたかについて算賀、大嘗会、歌合を検討してきたが、大嘗会のように各勅撰集各々の編纂態度により撰入も異るが、しかし、歌合の場合のように時代の進展にかゝわる場合も考えられる。

(二) 内容的考察

賀歌はいろいろな機会に於いて詠まれているが、その内容面についてはどうであろうか、長寿を祝う、御代を寿ぐ、民の富めるを賀す、出生を祝う、元服を祝う、立后を祝う、題詠屏風により自然のものに対して、等あるが、長

寿、御代を祝う歌が中心となつて、それぞれ八十首、九一首となつている。それに出生、元服等を祝う歌が大部分を占めている。

一般に時代が下るに従つて長寿を祝う歌は少くなつているに反して、御代を寿ぐ歌は多くなつている。

五、表現について

賀の歌は主として長寿を祝う歌が中心となつているだけに、直接自然を詠じている歌はあまりない。自然物に事寄せて表し、又比喩を自然に、自然物にとつているのが目立つ。

㈠

題志らず　　読人志らず

我齢君がやちよにとり添へて
留めおきては思ひでにせよ　（古今三四六）

の如く、祝のことばを、自然物その他何も介在する事なく、直接詠んでいる。この類のものを各集拾つてみると、

	古今	後撰	拾遺	後拾遺	金葉	計
四	二	七	二	一	六	

面白い結果となる。詞花、千載、新古今にはない。即ち、時代が下るとこのような歌はみられない。これ等は題詠、画詠の場合でないと言う共通点を持つ歌である。

㈡自然物、又は物にことよせると言う程でもないが、対象語としては、石、真砂、塵水、月日等で右の語に限定されている。

君が代は曇りもあらじ三笠山
嶺に朝日のさゝむかぎりは　（詞花一六三）

君が代は天のかご山出づる日の
てらむ限は尽しとぞ思ふ　（千載六〇八）

右の例のように、同一素材を扱う場合、たとえの方向は決まつている。素材が限定され、表現も同一方向となれば、類型がめだつはず。

㈢　更に賀歌では、動物、植物を詠じこんだ即ち、動植物に賀の意を添えたものを可成り見出し得る。

動物にあつては鶴、千鳥、きじ（拾遺二六六一首のみ）時鳥（古今三五九一首のみ）松虫（拾遺三六一の一首のみ）等

がまふ野の玉のを山に住む鶴の千年は君が御代の数なり（拾遺二六五）鶴は八代集賀歌に二十首に詠じこまれているが、鶴は昔から人の長生の祝言にたとえていわれている鳥であり、勿論賀歌に於いては好んで使われたであろう。

植物にあつては動物よりも種類が多く、松、梅、若菜、桜、菊、竹、椿、桃、藤、常磐木等であり植物にあつても素材を限定し、著しいのは松を含む歌が全歌数の二三、六%にも及んでいると言う事だ。しかも松を詠う場合は常磐、長寿と言う賀歌であるが為に一方向からのみ詠まれて

いる。

賀歌は内容的には長寿の祝が中心であり、又、その他の祝を表現するのにも、定まつた素材（たとえ）により、しかも、一定方向からの譬え方をしているが故に賀歌は類型化が目立つのだと思う。

一方、類型化したものに、屏風の歌、題詠等が考えられる。屏風の歌は描かれた絵に制約されるし、題詠と変りはない。「賀歌」での題詠はこれまた祝の歌となるような題で一定している。その一例を示すと、竹 不レ改レ色 松 契二遐 年一、花 契二遐 年一、鶴 契二遐 年一、花 有二喜 色一等である。類型化の根本には屏風歌や題詠の発達に理由があるものと思う。

結　び

以上八代集に於ける賀歌の一考察は終つたのであるが、その結果をまとめると、

㈠ 賀歌の部は八代集すべて有する部であり四季の次に位置する部である。

㈡ 賀歌は全般的に少数の部である。その中でも後撰集が特に少い。これは理由の一部分ではあろうが、つまり、恋の歌に重点を置いた後撰撰者が、恋と贈答歌になる要素の乏しかつた賀歌を、少数にとゞめた結果となつたのではなかろうか。編纂意識の相違の表われであろう。

㈢ 賀歌は算賀の時、大嘗会、歌合の時、その他多くの機会に詠まれている。古今集に、大嘗会の歌が大御所御歌の部にある。大嘗会の歌であり、明らかに賀の歌である。賀歌の部に入れていないのは、分類が徹底していなかつたか、又は古今集の編纂態度の相違によつてこのような事となつたのだろう。

平安前期に、賀歌の部は歌合の歌を撰入していない。古今集のごときは、九十五首も歌合の歌を撰入しているのに古今の賀歌部は、一首も撰入していない。平安前期と後期の歌合の題の相違により、即ち、後期になると、「祝」の題が加えられた為、前期は、賀歌に適する歌が見出されなかつたためだろう。この場合は時代の進展によるものと言える。

㈣ 賀歌の内容は長寿、御代の長久が中心であり、出生、元服、裳着などを祝う、つまり人間一生の健全を祝福する歌を詠んだものである。他の集では御代の長久が重要な位置を占めているのに古今集では一首も含んでない。

㈤ 長寿やその他の祝いを表現するのに、定まつた素材により、しかも、一定方向からの譬え方をしているが故に、賀歌は類型化が目立つのであろう。

一定素材により、一定方向の譬え方をしているが為もあるが、その根本的なものは、平安時代になつての屏風の歌、題詠の発達に類型化の理由が考えられるのではないかと思う。

（三十三年度卒業）